登場人物紹介

エリス　シスターの少女。17歳。Cカップ。
　　黒髪ショート。
　　ペニスの大きさは成人男性の平均ほど。

メア　　幼い少女の姿をした淫魔。
　　美しい女性をふたなり化させて搾精する。

「シスター様、私の懺悔を聞いてくださってありがとうございました」

教会の懺悔室の中、私と向かい合った女性が頭を下げました。

彼女は丘の上の大きな屋敷のメイド。

主人に迫られ、関係を持ってしまったことを私に懺悔したのです。

「ありがとうございます。この町のシスターがエリス様で本当によかった……」

メイドはそう言って肩を震わせて泣き出しました。

私はできるだけ優しくその肩を抱くと、そっと背中を擦りました。

「大丈夫ですよ。人は弱いものなのです。そのことを、主もわかっていらっしゃいますよ。またなにか、ひとりでは抱えきれないことがあれば、いつでも教会にいらしてくださいね」

そう、人は弱いものなのです。

妻帯者でありながら、メイドに迫る主人。

いやよいやよと言いながら、主人を受け入れ姦通の罪を犯し

てしまうメイド。

彼らだけではありません。

誰もが誘惑に負け、罪を犯してしまうのです。

私は、意識を現実に戻そうとしました。

そろそろ夕食の支度をしなければ。

そう思いながら、どうしても私の頭の中は先に聞いたメイドの懺悔が頭から離れませんでした。

貞淑そのものに見えたあのメイドは、夜はいったいどのような顔をしているのでしょうか。

彼女はどのようにからだを触られ、どのような声を上げ、そして、どのような表情で主人の欲望を受け入れたのでしょうか。

ああ、私もまた、なんと弱いものなのでしょうか。

主の代理として懺悔を聞いていたはずの私は、気づけば心の中を煩悩でいっぱいにしていたのです。

このままでは、夜の祈りを捧げることもできない。

煩悩にまみれた聖職者の祈りが、一体何に届くというので

しょうか。

私はそっと、修道服のスカートを持ち上げ、性器を露出させました。

一度自慰を行って、心を清浄に保つ必要に私はかられていたのです。

これは、仕方のない行為です。

ですが、もし今誰かが教会に入ってきて私が上げる声を聞いたら、あらぬ誤解を招いてしまうかもしれません。

私は声が出てしまうのを防ぐため、スカートの裾を口に咥えました。

右手の中指をそっと入り口にあてがうと、そこがじんわりと湿っているのを感じました。

メイドの淫欲にまみれた懺悔を聞くだけで、私の膣は愛液を分泌させてしまっていました。

私は指でそっと、くすぐるように陰唇を上下になぞりました。

それだけで、私の濡れそぼった陰唇はくちゅ、と湿った音を

立てました。

ん、ふぅ、と吐息が漏れて、私は改めて声が出ないようにスカートを噛み締めました。

左手でそっとそこを広げ、その上、勃起して存在を主張する陰核を指の腹で軽く押しつぶします。

私の頭に電流が走り、私はうっと声を上げました。

そのまま私は指をくりくりと動かして、陰核への刺激を続けました。

そっとなぞり続けているだけなのに、あまりの刺激の強さに腰が跳ねました。

やがてひときわ強い電流が頭の中に走り、私はうう、と唸り声を上げながら背中を丸めて全身を痙攣させました。

お腹がぎゅ、と疼くのを感じました。

私が垂らした涎でスカートが湿りました。

私はスカートから口を離すと椅子に体を投げ出し、はぁはぁ、と浅く、荒い呼吸を繰り返しました。

ぼうっと天井を見上げていると、くすくす、と笑い声が聞こえ

ました。

妖精の声のような、あるいは歌うような軽やかな笑い声です。

はっとそちらに視線を向けると、先ほどメイドが座っていた場所に美しい少女が座っていました。

お姫様かと見まごうような、美しい少女でした。

黒と白のモノトーンの豪奢なドレス。

細かい刺繍が施されていて、スカートは何重にもふわりと広がっていて、まさにお姫様のようなドレスでした。

なによりお姫様のようだったのは、その美しい顔でした。

豪奢なドレスを着ているのに、服よりも先にその顔に目が惹きつけられてしまうのです。

大きなガーネットのように赤い瞳が、懺悔室の中で昏く輝いていました。

肌は雪のように白く、髪は腰にかかるかかからないかの長さの、絹のように美しい淡い金色の髪でした。

その美しい白い肌と淡い金色の髪が、薄暗い懺悔室の中で、それ自身が光っているかのように淡い光を放つのです。

10歳を少し過ぎたくらいの少女に見えましたが、ほっそりとし

た顔の小さな均整の取れた体つきで、幼いというよりは精巧な人形のように美しい、という印象を受けました。

くすくす、と彼女が口元を手の甲で覆って上品に笑い、彼女に見惚れていた私は、はっと我に返りました。

「あ、あなたはいったい……」

どこから。

いつから。

先ほどの私の行為を、見ていたのですか？

私の中で疑問がぐるぐると渦を巻いていました。

「私はメア」

少女が名乗る声で私は、はっと現実に引き戻されました。

「わ、私はエリスです……」

混乱する頭で、私は考えるよりも前に名乗り返していました。

「私、懺悔したいことがあるんです」

「え？　え？」

私はただただ混乱していました。

ついさっきまで自慰に耽っていた聖職者に、目の前の少女はいったい何を懺悔しようというのでしょうか。

メアはすっと立ち上がると私の前まできて、そのまま私の膝の上に向かい合う格好で腰を下ろしました。

金木犀のような、甘ったるい少女の香りが私を包みました。

息をするたびに私は、くらくらと、恍惚とした感覚に襲われました。

吸い込まれるような大きな赤い瞳が至近距離から私を捉えました。

「私、ときどき頭の中が卑猥なことでいっぱいになって、抑えられなくなってしまうことがあるんです」

「……え？」

私はますます混乱しました。

目の前の美しい少女と『卑猥な』という言葉の組み合わせが、うまく繋がらなかったのです。

メアは私の頭巾を外し、そっと私の髪を撫でました。

「たとえば清純で可愛らしいシスターさんが、オナニーに夢中になっているのを見たときとか」

メアの湿った吐息が私の鼻にかかるのを感じました。

自分の顔がかっと火照り、瞳が潤んだのを私は感じました。

「ち、違うんです…！　これは…！」

「ふうん、違うんだ」

メアは、ふ、と笑いました。

鼻から息を抜くだけの軽い笑いでした。

私の肩を掴むと、脚を私の股の間に差し込んで押し広げました。

そのまま膝で、ぐ、と私の秘部をスカートの上から押して刺激しました。

「ああっ」

敏感なところに不意の刺激を受けて、私は声を漏らしてしまいました。

「違うんだ。膝で押されただけで、こんな声出しちゃうくらい敏感にしちゃってるくせに」

私の肩を押さえつけて逃げられないようにして、メアは膝でぐりぐりと性器への刺激を続けます。

彼女の膝が陰核と擦れるたびにぴりぴりとした刺激が脳に走りました。

メアがからだを揺らすたび長い淡い金色の髪が私の目の前

で揺れ、金木犀のような甘い少女の香りが漂って私の意識をくらくらと揺らします。

私の秘部はぐちゅぐちゅと水音を立てました。

私のからだは、小さな女の子に性器を膝で刺激され、音を立てるほどに濡らすほどに興奮していたのです。

「あ、ああっ、ああ」

声を抑えることなどできず、私は少女に刺激を受けるたびに嬌声をあげ続けました。

「やめて、お願い…どうか、んぅ」

私は肩に手を置いて少女をはねのけようとしましたが、からだにまったく力が入りませんでした。

私が触れた彼女の肩はこんなにもほっそりとした感触なのに、私はからだに力を入れることができず、それすらも押し返すことができなかったのです。

「全然やめてほしくなさそうだよ、エリス。こんなに嬉しそうにびくびくしちゃって、可愛いね」

メアは私の耳に触れんばかりに唇を近づけて、ほとんど吐息だけの声でそう囁きました。

湿った温かい吐息が、ふ、と耳の中に差し込まれ、そのぞくぞくとした感触に、私はからだをびくっと震わせてしまいました。

綺麗な金色の髪が私の首筋にかかり、絹の糸でくすぐられているような感覚に肌が粟立ちました。

「あっ、んああっ…」

声が自然と漏れてしまいます。

絶頂が近いことを感じた私は、身を捩って彼女から逃れようとしましたが、私の肩を押さえつける少女の手がそれを許しませんでした。

「あ、だめ。だめです。やめて、本当に、だめなの…」

「イっちゃいそうなの、エリス？　いいよ、イっちゃえ。私にエリスが可愛くからだを震わせて、懺悔室の中でイっちゃうところを見せて。ちゃんとイクイクって言いながらイクんだよ」

メアは私の耳のふちを軽く甘噛みして、じゅるっと音を立てながら舌でなぞりました。

頭の中を直接舐められたかのような刺激が走って、頭の中で小さな光が何度もぱちぱちと弾けました。

「あっ、イク、イクっ。ああっ、イクイクイクっ」

「いいよ。イっちゃえ」

　少女は私の性器を膝でぐりっと強く刺激しました。

「イク、イク！　ん、ううううぅ、ああぁ！　あああああっ！」

　頭の中が真っ白に弾けました。

　お腹がぎゅっと締まって、からだが跳ねました。

　腰が跳ねるたびに陰核が少女の膝に当たって、その刺激で私は絶頂し続けました。

「んあっ、ああっ、ぐぅ、うぐぅ、ううううぅ」

　気持ちいい。

　小さな女の子の膝で性器を刺激されて、絶頂してしまった。

　懺悔室の中で。

　私は聖職者なのに。

　私は胸を大きく上下させてはぁー、はぁーと息を吸い込んで、吐き出して、ぼぅっとする頭と涙で滲んだ視界で天井を見つめていました。

　こんなに頭が真っ白になるような、強い絶頂は初めてでした。

「はあ……はあ……」

息が落ち着いてくると、口元を冷たい汁が垂れ落ちていくのを感じました。

私はあまりの快楽に、口をだらしなく開いたまま涎を垂らしていたのです。

なんとはしたない、と自分が恥ずかしくなりました。

「お疲れ様、エリス。可愛くイケたね」

メアは私の頭を撫でると、顔をぐっとわたしに近づけました。

近すぎて彼女の体温を感じられるほどに。

小さな赤い舌をちろっと出して、私の垂れた涎を舐め取りました。

「美味しい」

小さく呟いて、私の上唇を舌でなぞりました。

くすぐったいような柔らかい舌の刺激に、私は身を捩らせました。

メアは口を離しました。

私の目は彼女の唇に吸い寄せられていました。

淡い桜色の、薄い唇。

その唇が再び私に近づき、ちゅ、ちゅ、と音を立てながら私の上唇を挟みました。

柔らかく、しっとりと湿った、甘い感触でした。

「ん、ふ、う」

くすぐったい刺激に私の喉が揺れ、その響きが吐息として彼女の唇に吸い込まれました。

メアは舌で私の上唇と下唇の間をつついて、そのまま私の口腔内に舌を滑り込ませました。

「ん、んぅ！？」

私が口腔内の粘膜をなぞられる刺激に驚き身体を離そうとすると、メアはぎゅっと私を抱き締めました。

逃げられない。

頭がくらくらする。

身体に力が入らない。

布越しに感じる少女の体温に、金木犀のような甘い、甘い少女の香りに頭がくらくらする。

メアは自分の舌で私の舌を絡め取ると、ちゅうちゅうと音を立てながら私の舌を吸い上げます。

私たちは粘膜と粘膜を絡み合わせ、唾液と唾液を交換する激しい接吻を交わしていました。

口腔内を蠢くぬるぬるとした感触にからだの中がどんどん暑くなって、それと反対に力がどんどん抜けていきます。

「ん、ふぅ、ん、んんぅ」

息をしようとするたび、吐息が声となって私の口から漏れていきました。

唇と舌を絡めるちゅ、ちゅ、という音とふたりの吐息が、嬌声が懺悔室の中に響きました。

私のからだから力が抜けるのと裏腹に、私の陰核はますます硬く勃起して存在感を主張していきます。

陰核が修道服のスカートを突き上げて擦れる刺激に私は身悶えました。

「……え？」

どうして？

どうして陰核が、スカートを突き上げるほどに大きく？

なにかおかしなことが私のからだに起こっている。

私が疑問の声を上げると、私の上に乗る少女が唇を離しまし

た。

ふたりの唾液が唇の間で糸になり、それはすぐに切れて私の顎を濡らしました。

メアが私の上から降り、立ち上がりました。

私が自身の下半身を見下ろすと、間違いなく私の陰核が修道服を突き上げ、スカートに天幕を張っていたのです。

「……え？　え？」

混乱する私を見下ろしたまま、少女はくすくすと可愛らしく笑い声を上げました。

「よかった、うまくいったね」

少女は言い、私のスカートをめくり上げました。

出てきたものを見て、私は、ひっ、と息を呑むような悲鳴を上げてしまいました。

実物を見るのは初めてでしたが、そこにあったのは、それでも間違いなくペニスとわかるものでした。

私の陰核は、どういうことでしょう、男の人にしかないはずのペニスに姿を変えていたのです。

肌色の細長い棒が、天に向かって屹立してその存在を主張

していました。

棒の周りに青黒い血管がまとわりつき、その先端はかつて私の陰核だったもののようにぷっくりと膨らみ、わずかに先端だけが剥けた包皮の先端から真っ赤な亀頭が覗き、口を開いてそこから透明な粘液が垂れ、私のペニス全体をてらてらとぬめらせていました。

「ど、どうして…？」

私は、再び疑問の声を上げました。

「お姉さん、私ね、実はサキュバスなんだ」

「サキュバス……」

本で読んだことはあり、その存在は知っていました。

美しい女性の姿をした悪魔で、その美しさで聖職者を誑かし、精気を盗み、堕落させるものです。

その姿を書物の挿絵で初めてみたとき、美しい淫魔が聖職者のペニスを受け入れてよがり狂うその姿、そのあまりの恐ろしさに私の心はかき乱され、その晩は眠るまでに三回も自慰をしなければ心を落ち着けられないほどでした。

目の前の少女の正体が淫魔だと言われても、確かに納得は

いきます。

メアの美しさはそれほど非現実的なものでしたから。

しかし、それが私にペニスが生えてしまったことと、どのような関係があるのでしょうか。

そこまで考えて、私ははっと気が付きました。

「精気……」

私の目の前に立つ小さな淫魔は、くすくすと可愛らしい声で笑いました。

「そう、サキュバスは精気を盗むの。精液は精気が一番濃い体液だからね。だから、どうしても可愛いエリスの精気が欲しくて、エリスがおちんちんの気持ちよさでおかしくなってるところが見たくて、エリスにおちんちん生やしちゃった」

呆然とする私の手を取って、小さな淫魔は私に自らのペニスを握らせました。

「ひゃっ」

自分の手が軽く触れただけで、刺激の強さに私は甲高い声を上げてしまいました。

「はい、それじゃエリス、自分のおちんちん握って、男の人み

たいなオナニーしてみよっか」

メアはにっこりと笑いました。

「ど、どうして私が自慰を……」

私の声は震えていました。

小さな淫魔は眉を軽く寄せて呆れた表情を作りました。

いったい何を疑問に思っているのだと。

「エリス、私は淫魔で、エリスから搾精しようとしてるんだよ。このままじゃエリス、私にレイプされて、淫魔と交わって、精気全部吸われちゃうんだよ。だから、そうなる前に自分でオナニーして、精子全部だしちゃわないと」

それにね、と言って彼女は私の耳に口を寄せました。

「ふたなりちんぽはね、クリトリスが変化したものだからね。触るとクリとおちんちんの気持ちよさがいっぺんにきて、すっごく気持ちいいんだよ」

言い終わると、私の耳に息をふーっと吹きかけました。

わたしの身体はぞくぞくとした刺激にびくっと震え、私のペニスも同じようにぶるんと震えました。

そうです、淫魔に搾精されるくらいなら、自分でペニスをしご

いて自分の手で精液を搾り出さないと。

今のペニスに変化した陰核を触ったら、いったいどれだけの快楽を得られるんだろう。

違う。私が自慰をするのは、あくまで淫魔に搾精されないためであって……。

ぐるぐると頭の中で疑問がうずまいていました。

が、そんなこともうどうでもいい、早くペニスをしごきたい、そんな気持ちで頭がいっぱいになって、私は自分のペニスを握る手に力を込めました。

「んああっ！」

それだけでびりびりと頭の中に鋭い快感が走り、私は声を上げてしまいました。

「ほらほら、ちゃんと上下にしこしこしないと」

淫魔の可愛らしい声が、快感による耳鳴りで痺れる私の耳にぐわんぐわんと入り込んできます。

私はしこ、しこ、と恐る恐る、そっと優しく上下にしごきました。

「あっ！　ああっ！　だめ！　おかしくなるっ！」

自分の手が竿を一往復しただけで、頭が真っ白になるくらい

の刺激が走って、私はペニスから手を離してしまいました。

「もう、しょうがないなぁ」

　涙で滲んだ視界に、くすくすと笑う小さな淫魔の姿が揺れました。

「私がお姉さんの代わりにしこしこしてあげるね」

「や、待って…！」

　淫魔が私のペニスをそっと握りました。

　白く、ほっそりとして、それでいて柔らかく、温かな手でした。

「動かすね」

　淫魔が握りしめた私のペニスを上下にしごき始めました。

「ん、んぎゅ！　ううっ！　んあああああっ！」

　頭が真っ白になるような強烈すぎる刺激に、私はわけもわからず叫び声を上げました。

　想像してみてください。

　敏感な陰核を、手で包むことができるくらい肥大化させられ、上下にしごかれているのです。

　それはどれほど強い刺激でしょう。

「あはっ、お姉さんのおちんちん、すっごいびくびくして、び

ちょびちょに濡れて、いやらしい音立てちゃってるよ」

　淫魔の小さな細い手が往復するたびに、わたしのペニスがにちゃにちゃと粘ついた音を立てました。

　私は腰をがくがくと震わせて嬌声を上げ続けました。

「ああっ！　イク！　もうだめっ！　イクイクイク！」

「いいよ、精液出しちゃおっか。聖職者のくせに淫魔におちんちん手でしごかれて、精液どぴゅどぴゅ噴き出しちゃうとこ、私に見せて」

　メアは空いている方の手で私の腿をぴしゃりと打ちました。

「ほら、足閉じて。お腹にぎゅっと力入れて」

　私は言われるままに、足を閉じてお腹の内側にぎゅっと力を入れました。